沖縄における男性の祭祀

―シヌグとアミドゥシ―

黒田一充

一　沖縄の神役

沖縄の祭祀では、女性の神役（神女）の役割が非常に大きい。男性の兄弟を女性の姉妹が守護神として守るオナリ神の信仰があり、神衣裳に着替えた女性を神として男性たちが拝む様子を祭りでしばしば目にする。集落の祭りは、ヌル（ノロ・祝女）をはじめとする女性の神役が中心となって儀礼が行われるが、近年、高齢化のために、神役の数が急速に少なくなっている。

筆者が最初に沖縄の祭りの調査をしたのは、一九九一年の伊是名島の田名（だな）の海神祭であった。海神祭は、旧暦七月を中心として沖縄本島の北部の集落で行われ、神女たちが集落内の御嶽（うたき）で拝みの儀礼などを行った後、海岸へ降りて浜で海神を見送る祭りであり、集落によってウンジャミやウンガミ、あるいはウプウィミとも呼ばれている。

旧暦七月十七日が祭りの当日で、集落背後の山腹にある田名屋（だなやー）という建物に神役の女性たちが集まり、海神を迎えて神歌（ウムイ）を歌い、船漕ぎの儀礼を行った後、海岸へ移動し、浜にある岩場の上から葦（オー）を投げて海神を

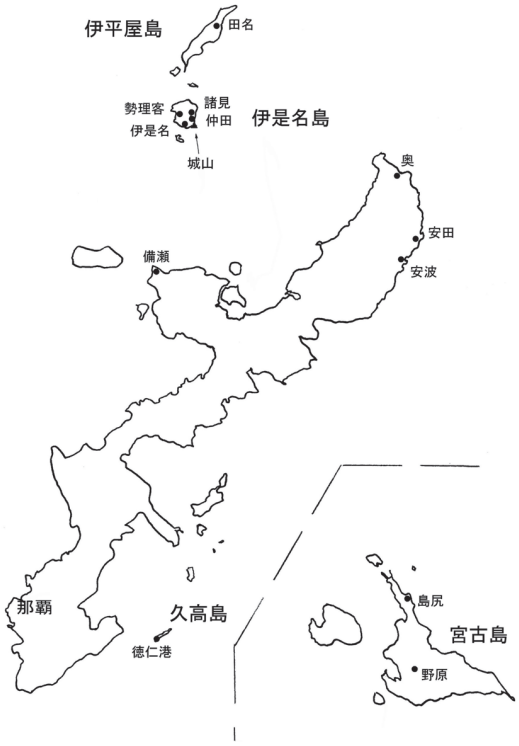

図１　祭祀関係地図

写真１　伊平屋島・田名の海神祭

見送る。もとは二十名の神役の女性がいたようだが、[1]この時には十五名が参加し、そのうちの十二名で岩場の上での儀礼を行っていた。

一昨年（二〇〇五年）、久しぶりに伊平屋島に渡ったが、田名屋の建物が改築され、境内も整備されて集落から車で上って行ける広い道もできていた。しかし、変わっていたのは周囲の風景だけではなく、参加した神役の数が七名に減っており、護岸工事の影響か、小さくなった岩場には五名の神女しか上らなくなっていた［写真1］。

神役の数が減ると、儀礼も昔のままに行われなくなり、伝承自体も失われていく。沖縄の祭りが急速に変動していることを実感する。沖縄の祭祀については、文献資料がほとんど残っていないこともあって、聞き取り調査と儀礼の観察が従来からの主な研究方法であったが、儀礼の歴史的な変遷をたどるには、それらだけでは有効な手段とは言えなくなっている。今後の研究の方法としては、研究者による過去の調査報告も資料として分析する必要があると考える。

田名のウンジャミを調査して以来、主に沖縄本島北部で行われている海神祭を調査し、女性の祭りとされる海神祭に対し、それと比較される男性たちが集落を祓うシヌグの儀礼をも含めて論考をまとめた。[2]しかし、どうしても沖縄の祭祀は女性の神役に目がいきがちであり、男性の祭りについてはこれまであまり重点的に研究されてはいなかった。そこで今回は、各地のシヌグなど男性が中心となる祭りの儀礼を集中的に調査し、これまで沖縄では主流とは考えられていない男性の祭りについて考察してみたい。

二　沖縄本島北部のシヌグ

沖縄本島の北部から中部にかけての地域には、シヌグと呼ばれる豊作や無病息災などを祈る祭りがあり、国頭村から本部半島にかけての集落では、旧暦七月の盆の前後に行われている。

同じ時期の海神祭は、女性の神役が中心になるのに対し、男性が中心となる祭りであり、その儀礼の中でもっとも重要な村の祓いの儀礼は、男性たちが山に登って植物の蔓を身体に巻きつけて神に変身し、木の枝を持って集落を祓ってまわる。シヌグとウンジャミは、集落によって両方が連続する日程で行われる所、一年交代で行われる所、どちらか一方だけが行われる所とさまざまである。そのためこれまでは、小野重朗が、

シヌグ　―　男の祭り　―　山の祭り
ウンジャミ　―　女の祭り　―　海の祭り

という分類をしたように、[3] この両方の祭りを対比する視点で研究されていた。

シヌグの代表的な研究として、各地の儀礼を調査した源武雄の論考がある。源は、シヌグの儀礼には、各家を男性たちが祓う「祓いの行事」、大弓（ウフユミ）・農具行列・特定の畠での祈願など豊作を祈る「世果報（ユガフー）予祝の行事」、ビーンクイクイ・舟漕ぎ・ヤーハリコーなど「古い村落生活を反映する行事」、そして祭りの際に必ず女性たちが輪になって踊る臼太鼓（ウシンデーク）などの「シヌグ舞」といったさまざまな要素が含まれていることを指摘した。さらに「祓いの行事」に関しては、村や家々の祓いの儀礼がどのように行われているかによって、次の三つの分類ができるとした。

① 安田型（安田・安波・奥）＝男が村人ひとりひとりをお祓いしてまわる行為を主とする。一日神が村の人びとのために祓いの行事をやるという民俗は非常に古風。

② 伊是名型（伊是名島・国頭村辺戸・与論島）＝男が各戸巡りをして家々の祓いに主力をおく。子どもが主となり、安田型から移行した型。

③ 備瀬型＝男性だけではなく、女性神職（神女）も各戸祓いに参加する。ノロ（祝女）制度の発達の影響によって女性の神職が介入した新しい型。

そして、男性たちが村人ひとりひとりを祓う安田型がもっとも古い形態で、各家を祓う伊是名型が次に新しい形態、女性の神職が参加して各家を祓う備瀬型が琉球王朝の祝女制度の確立以降の新しい形態だとする。[4]

沖縄の村落祭祀に関するまとまった文献資料としては、一七一三年に編纂された『琉球国由来記』が古いものであるが、海神折目やシノゴ折目という祭りの名称と供物の内容が記されている程度で詳しい記述はほとんどなく、文献資料からこれらの祭りを検討することは非常に難しい。そこでまず、現地での聞き取り調査に加えて、現在行われていない儀礼についてはこれまでの調査報告書も参照しながら、このシヌグの分類を再検討したい。

三　安田のシヌグと安波のシヌグ

沖縄本島の北端に位置する国頭村では、各地でシヌグやウンジャミが盛んに行われている。特に、東海岸の奥・安田（あだ）・安波（あは）では、毎年交互にシヌグとウンジャミの両方が行われる。中でも、安田のシヌグは古い伝統が一番よく残っていると考えられていることから、国の重要無形民俗文化財に指定されている。

祭りは旧暦七月上亥日だが、数日前に準備として、村の広場（アサギ

庭（まー）に建つ神アサギと呼ばれる屋根と柱だけの建物の茅葺き屋根の補修を行い、屋根の内側の一番高いところに魚を二匹吊す。当日の十時ごろから、集落の草分けの家と一門から代々出る根神（ニーガン）を中心に神役の女性たちが集まって、広場の北側にある根所（ニードーマ）、神アサギ、ナハメー屋敷の順に拝み（ウガン）の儀礼を行う。

十一時ごろから、山ヌブイといって男性たちはそれぞれの血筋の一族ごとに決まっている集落の北西・西・南西にあるササ・メーバ・山ナスと呼ばれる場所へ向かう。ササ・メーバ・山ナスの順に、古い家筋から新しい家筋が集まっているという。集合場所にあらかじめ用意してあったガンシナー（ゴンズイ）という植物の蔓を身に巻きつけ、頭にミーハンチャーという赤い花を付けた草冠（ハブイ）を被り、木の枝を持って神に変身する。いわゆる草装神である。

十三時ごろから、メーバの山の上から太鼓を先頭に、「イエー・ヘー・ホイ」という掛け声を唱和しながら、男性たちが降りてくる。山の中腹を通る県道を横切った所にある広場で輪になって、左回りに三周する。一周するごとに「スクナーレー」の掛け声がかかると、手にした枝で地面を祓う所作をする。その後、森の中を通って集落へ降っていく。このメーバの太鼓の音を合図に、他の場所からも行列が出発する。

集落西側を流れる上の川（ウイヌハー）に架かるアギ橋の上では、家族の女性たちがビールやジュースなどを用意して一行を待つ。これは、サカインケーあるいはサカムカエと呼ばれる。森の中から現れたメーバと山ナスの一行が合流し［写真2］、橋を渡って集落に入った殿内畑（トンチバル）でササの一行とも合流する。殿内畑にも女性たちが待ち受けており、その周囲を右回りに三周し、「スクナーレー」の掛け声がかかるとともに手にした枝で女性たちを祓う。その後、アサギ庭、公園などでも女性や山に登らなかった男性や子どもたちを祓いながら浜へ出て、身につけていた草枝を脱いで海に入る。上の川へ戻って水浴びをし、旗を先頭にして、三線の音楽にのってアサギ庭へ踊り込んで儀礼を終える。

写真２　国頭村・安田のシヌグ

十八時ごろから、アサギ庭で男女が草刈りの所作をする田草取り（タクサトエー）、紐をくくった大きな丸太を揺らし、最後に神アサギの屋根にぶつけるヤーハリコー、女性たちのウシンデークやカチャーシーなどの踊りが夜遅くまで続き、翌日にもウシンデークが行われる。

宮本演彦の調査報告によると、戦前までは、シヌグ野（モー）という場所に仮屋を建てて男性たちが三日間籠もり、女性は昼間にアサギ庭へ集まった。二日目の夕方には、男性と女性の代表による相撲が三番取られ、女・男・女の順で必ず女性が勝つという儀礼が行われたという。[5]

安田の南にある安波集落でも、明治末までのシヌグには、山から草に身を包んだ男性たちが降りてくる儀礼が行われていた。これも宮本演彦の報告によると、一日目に男の神役と女性の神役がそれぞれを拝む儀礼があった。二日目には、ソォジ山、メエバ山、フガ山に登った十五名の男性が草葉を身につけて神に変身し、山を降りて一族ごとに各戸を祓って廻り、村の広場に集まった村人たちを笞で打ち、海に出て身につけていた草を流した。この日から三日間、安波川のそばにあるシヌグ野（モー）に建てた仮屋に村中の男性が集まった。一方女性たちは、昼間はアサギ庭に集まり、夜は各家に帰ったという。四日目の夕方に、アサギ庭でインコーの儀礼・猪狩り・魚捕り・唐船柱（トータビ）の儀礼が行われたという。[6] 現在は、夕方から神拝みの後、魚取りやウシンデークなどがあるだけである。

安波でも各家を祓う儀礼と各個人を祓う儀礼の両方が行われていたようだが、どちらの集落でも、祭りの最初に神々が現れて村中を祓い、その後三日間男性たちがお仮屋に籠もっていたことがわかる。

四　伊是名島のシヌグ

伊是名島は、国頭村の北西沖に位置する島で、北の伊平屋島・野甫島と南の伊是名島を、『琉球国由来記』ではまとめて伊平屋島と記している。

伊平屋島と伊是名島では、毎年シヌグと海神祭が連続して行われる。伊平屋島の田名のウンジャミでは、旧暦七月十六日夜に海神と呼ばれる女性の神役が各家を廻る。男性を家から出し、竈に祀られている火の神の後ろに葦の葉を挿したという。十七日午前中に神女たちが海岸の岩場の上から神を見送る儀礼があり、夕方には田名屋で男性の神役も参加してティルクグチが唄われる。戦前には、この夜にも各戸廻りが行われたという。十九日にシヌグが行われ、新生児のお祝いをする。かつては白い衣裳に襷と鉢巻姿の少年たちが村の御嶽から海岸へ向かい、途中で出会った人を小さな棒でたたく儀礼があったようである。

伊是名島では、諸見・仲田・伊是名・勢理客の各集落でウンジャミとシヌグが行われている。島の南東には伊是名城があった城山があり、その山中にはナーと呼ぶ聖地が集落ごとにある。旧暦七月十七日のウンジャミでは、女性の神役たちが順にナーを廻って神事を行う。

翌十八日がシヌグで、早朝から各集落の神アシャギや公民館前に男児たちが白い衣裳に白鉢巻で、白木の棒を持って集まり、自動車で城山に向かう。もとは五・七・十三歳から三年間ずつ参加することになっていたが、現在希望者は誰でも参加でき、衣裳も小学校の体操服姿になっている。大人は、区長ともうひとりの男性が神役として同行し、九時から十時ごろに、それぞれの集落のナーに登って儀礼を行う。

諸見集落のナーは城山の山頂近くにあり、男児たちはそこに湧いている泉の水面を棒で打ち、絶壁の上にある岩の周りを左に三回廻って山を降りる。調査時には草が生い茂って危険なため、岩の前の広場で輪になって廻っていた。安田でも草を身につけた後、輪になって左回りに三周してから山を降りており、神に変身する所作だと思われる。しかし、伊是名島では、草を身に巻きつけることはない。

その後、山を降りて各集落へ戻り、数人ずつのグループに分かれて各家を祓って廻る。伊是名集落では、集落の中心に茅葺きの神アシャギが残っており、その西隣にヌル殿内（とうんち）という神を祀る建物が残っている場所がある。男児たちはそのヌル殿内を二組に分かれて出発し、集落の東側と西側から各家を廻る。家に入ると母屋の東側の一番座（客間）から中へ入り、二番座（仏壇）、三番座（食事をする）の順に部屋を廻る［写真3］。昔は留守であっても屋内に入り、土足で畳に上がったというが、現在は許可された家だけを祓う。その際、家人の男性は家の奥に隠れるが、女性は家の外に出る。家の中を祓った男児たちは、庭で棒打ちをしたり、相撲を取ったりした後、御祝儀やジュースを貰って次の家に向かう。すべての家を廻るとヌル殿内で昼食を食べ、しばらく遊んだ後、十五時ごろ解散する。この男児たちの祓いの儀礼の間、別に女性の神役たちが諸見・仲田・伊是名・勢理客の順に各集落の神アシャギを廻って神事を行っており、それが終わったころに男児たちが解散している。

特にこの島のシヌグについては、『琉球国由来記』（巻一六　伊平屋島）に詳しい記事が載っている。

写真3　伊是名島のシヌグ

七九　シノゴオリメノ事　七月、島中ニテ日撰仕申。遊一日ノ事

右、アクマハライトテ、男童十人程、アマミ壱人、裃衣・袴着テ、白サジ、シレタレ結ビシテ、手々ニ棒ツキ、アマミ人、並其日ノ年ナフリノ人、弓矢持、先立仕「オナヂヤライハウ　ヱイヤイハウ」ト唱テ、家々ニ入リ、又、島ノニシ崎マデ行テ、ネヅミヲ取リ、年

ナフリ持タル矢ノサキアテ、海ニ入レ捨テ、村ニ帰リ、一所ニ寄合、神酒持寄祝申也。

男童十人程が白鉢巻（サジ）に裃衣・袴姿で棒を持ち、各家を廻って悪魔払いをして廻り、島の西崎でネズミを海に流したという。現在も島の西側の勢理客では、各家を祓った後、海岸に出て藁に包んだネズミの死骸を海へ流す。これらのことから、この記事には伊平屋島とあるが、伊是名島のシヌグの儀礼に記述の様子がよく残っている。また文中に、アマミ壱人と年ナフリノ人が弓矢を持って参加していたという記述がある。年ナフリノ人は、年男ではないかとされ、アマミ人は沖縄の創世神話に登場する女神のアマミキョだと考えられている。[7] その推測が正しいとすると、この儀礼には女性が参加していたことになる。弓矢を持って女性の司祭者が家を祓う儀礼は、備瀬のシニグにも見られる。

五　備瀬のシニグ

本部町の各集落のシヌグは、数日間にわたる祭りである。[8] 海洋博公園の北側にある備瀬では、旧暦七月二十日から二十六日まで六日間の日程である。

初日の二十日は、大折目（ウプマユミー）といい、集落の中央にある根屋（ニーヤ）（神社ともよばれる）前のアシャギ庭（モー）の西隅に神酒を入れた容器を置き、その横に四本の柱に芭蕉の葉で屋根を葺いたハギャーと呼ぶ小さな仮屋を建て、その中に魚を吊して豊漁を祈願する。二十一時ごろ海浜で、海に浮かべた舟を神女が押したり引いたりする所作を行う。二十二日のサグンジャミが祓いの儀礼である。

二十三日は男（イキガ）のハシーチで、十八時半ぐらいから男児たちがアシャギ庭に集まり、名前を書いたものを根屋に納めて健康祈願をする。アシャギ庭で会食しながら、一時間ほど過ごしてハシーチとよぶ強飯（おこわ）を貰って帰る。二十四日は女（イナグ）のハシーチで、今度は女児たちが集まって同じように会食する。二十五日がシニグで、夕方から女性たちのシニグ節の行列や旗頭を先頭にした行列が集落内を廻る。アシャギ庭で豊作祈願の後、五人の男児による御前風の踊りやシニグ舞（ウシレーク）などの踊りが行われる。二十六日のタムトーイには十九時ごろからアシャギで神事を行い、一連の祭りを終える。

サグンジャミは、根屋に神人や地区の役員たち十人ほどが集まって、二十時ごろから村内の各家を祓って廻る。先頭の男性が小太鼓をたたき、「ウンサフムッチモーレー（酒を持ってこい）」と叫びながら進む。一行は海岸沿いの道を集落の北端まで行き、今度は中央の道を戻ってくる。途中、太鼓の音を聞きつけ、外へ出て祝儀袋を差し出す家があったり、一行が来るのを飲食の用意をして待ち受けていたりする家がある。かつては参加する男性も若者が中心であったようだが、現在は年齢層が高くなっており、女性も白い衣裳を着たヌル神と根神（ニーガン）の二人に普段着の女性がひとりの三人だけが参加していた。

根神は弓矢を持っており、辻ごとに立ち止まって唱え事を言いながら、弓を射る所作を三回行って悪疫を祓う［写真4］。また、祓いを希望する家の入り口でも弓で射る所作をしてから、一行が中に入る。庭に莚を敷いて飲食の用意がされているが、最初に全員が東を向いて座り、最前

列に座ったヌル神が、その家の家族の名をあげて健康や一家繁栄を祈る拝みの儀礼を行う。その後、飲食の接待を受け、しばらく過ごしてから次の家へ向かう。昔はすべての家を廻ったため、朝の四時ごろまでかかったそうだが、現在は希望する家だけなので、〇時ごろには終了する。

確かに備瀬では、男性の神役だけではなく、女性も参加している。これが、源武雄の言うように、祝女制度の発達の影響かどうかは史料がなくわからないが、おそらくシヌグが男性を中心とする祭祀であるため、女性が参加する型を新しいものと考えたと思われる。しかし、『琉球国由来記』のアマミ人が女性の神役だとすると、伊是名島のシヌグも男女で祓いの儀礼が行われていたことになり、これでは分類②と③の区別はできない。さらに①の分類の中でも、安田と安波は男性だけが祓いを行っているが、奥の場合も同じとは言えないようである。

写真４　本部町・備瀬のサグンジャミ

六　奥のシヌグ

奥は、沖縄本島の北端の辺戸岬から東海岸を南下した所にある集落で、那覇市から本島の西海岸を北上した国道五十八号線は、辺戸岬付近から東へ向きを変え、奥集落の南側を通って集落の東端が終点となる。

奥のシヌグも、安田や安波と同じようにシヌグとウンジャミが毎年交互に行われる。旧盆後の亥日から三日間が本来の日程だったが、近年は旧七月二十五日以降で、土・日曜を加味して日程が決められる。

一日目がフーヨーサレーで、朝から男性たちが二手に分かれ、集落のすぐ西側のヤマジーと南東方向のシバヒジへ登る。そこで神木とされるシバヒの木を約一・五メートルの長さに切り出す。十時ごろに、丑年と未年生まれが務めるシドゥやニートイと呼ばれる太鼓持ちを先頭に山を降りてくる。集落の西入り口の郵便局前で、国道を歩いてきたシバヒジからの一行と合流し、そこに待ち受ける女性たちが迎える。そこで男性たちは、女性たちが持ってきた浴衣などを服の上から着て藁帯を巻き、頭に草冠（ミーハンチャマムフ）を被る。この浴衣はウナイ（オナリ）神の着物、すなわち男性の守護神となる姉妹の衣裳であり、戦前までは芭蕉布だったという。つまり女性の着物を着ているのである。

一行は、「フーヨーサレー」と叫びながら、郵便局周辺の道（カンミチ）を反時計回りに七周する。アサギ庭（マー）とシヌグ野（モー）でも大きな輪を作って七周する［写真5］。いずれも現在は三周で省略している。集落の中を通り、

東端の奥小中学校前の浜へ出て道端に草冠と木の枝を置き、堤防の上から代表の草冠と枝を海に流して祈る。

十八時すぎからアサギマーで、女性たちのウシンデークが行われる。かつては、シヌグモーで男性たちのお籠もりが行われたようだが現在はなく、仮屋だけが設けられている。

二日目も十八時すぎからアサギマーで女性たちのウシンデークがある。ただし、踊りの衣裳は毎日着替え、互いに衣裳を競うという。男性は、食事をしながら女性たちの踊りを見物する。この日、年によっては、イッスンニンゴ（一升二合）と呼ぶ仮装の女性たちが各家を廻る儀礼が行われる。

写真５　国頭村・奥のシヌグ

三日目は、十六時ごろからビーンクイクイという儀礼が行われる。シヌグモーのお仮屋に村の長老三人が座り、女性たちがその前でウシデークを踊る。その後、最長老が用意されていた桶に乗り、その前を太鼓・空手と棒術・旗（二名）・酒持ちが先導して、アシャギマーへ向かう。この時、「ビーンクイクイ」の掛け声とともに桶を担いだ男性たちが「エイヤサー」と桶を高く担ぎ上げる。これを繰り返しながらアサギマーに到着すると、左回りに三周して、長老を桶から下ろす。その後は、女性たちのウシンデークが踊られる。

現在の祭りの様子は以上だが、宮本演彦の報告には、次のように記されている。

村の東から男子七名、女装して山ジイに登りシバキシジという所に到る。村の西からも男子七名、女装して到り、ここで会す。十四名はシバキ、即ち樟の枝を長さ一丈位のを折り、右肩に担いで降りてくる。――この行事をシバオリという。十四名の先頭に立つ者は、その歳の干支の生れの者で、この群の中二人は鼓を持ってこれを打ち、一同は、ヘェヘェサレ、ホゥホゥサレと叫びつつ山を降りてくる。頭にはチヌマチガンダ（三味線蔓で頭巻蔓のこと）を巻き、ミーハンチャーの花をさした被り物をなす。

山の中腹の拝所（ウガンジュ）の庭に来て十四名、七回ヘェヘェサレ、ホゥホゥサレと叫びつつ樟の枝を持って巡る。この頃、小児たちも小枝を折って貰い、十四名の後方についてくる。次にアシャゲモウにて七回、

次にシヌグモオにて七回同じことを行い、海に行く。

午前十一時、ノロクモイは海に来る。十四名海に入り、樟、被り物を流す。シヌグモウに仮屋を建て、勢頭二人、シマノヒョウ（男の神人）一人この中に入り、一村の男子は仮屋の庭に集る。

午後四時頃、神アシャゲに集っている女子等、シヌグモウに至り、男子を連れて再び神アシャゲに行く。男子は槍、棒、鼓各一を先頭にして行列。神アシャゲでは女子たちが賑やかに臼太鼓をなすのを、男子はこれを見物する。

第二日シヌグモウより男子、神アシャゲに行く。この時、村一番の長寿の翁を槽（ウケ）に入れ、これを先頭として行列する。アシャゲ庭で猪捕と魚取とを行う。[9]

かつては山に登る男性の数が毎年決まっていたことや、仮屋に三人の神役が籠もる儀礼（形式的には三日目にシヌグモーの仮屋に長老三人が座っている）や二日目の猪捕りと魚取りの儀礼は現在なくなっているが、それ以外の儀礼は現在でも行われている。この記事で注目したいのは、村から山に登った男性は、いずれも最初から女装をしていたことである。このことは、『国頭村史』でも次のように記されている。

奥のフェーエーサレー。若者たちが山地とシバシ地の二か所に登る。子年生れか丑年生れかの者がニートイ（頭）になり、おなり神の着物を上に着て登る。山ではシバ木（アホガシ）を見つけてニートイが、「ウシタテテ、ビシトーチ」の掛け声で倒すまねをする。各自はちぬまたかつらにミーハンチャーをかざして頭にかぶり、シバ木を担いで下山する。

部落入口の大川のところで両組合し、シバ木の枝を折って各自持ち、円陣になって七回まわり、神人の迎えを待って、アサギ・ノロ殿内・カーチビ（川尻）に行き、各所で「フェーエーサレー、ヘーヘーサレー」ととなえながら七回まわり、カーチビから浜に出て、シバ木やかぶりものを海に流すのである。[10]

一行の先頭のニートイは、おなり神の着物を上に着て登ったとある。山に登る時点からおなり神の着物を着ていたために、宮本の報告には女装していたと表現されたのであろう。女性の着物を着て山に登り、草冠を被って山を降りてきていたのが、現在は山から降りてから着物を着るため、草枝を持って降り、それから草冠を被って身支度するように変わっている。

安田や安波のシヌグでは、男性たちが半裸で植物の蔓を身に巻いて草冠を被るのに対して、オナリ神の着物を着てから草冠をつけるというのは、何を意味するのだろうか。おそらくこれは、草装神に変身して祓いを行う儀礼に男性だけではなく、女性も参加していたことを表しているのではないだろうか。『琉球国由来記』（伊平屋島）の記事に見えるアマミ人というのが女性だとすると、男性に混ざって神女も山降りの儀礼に参加していたことになる。

ここから推定すると、シヌグの村を祓う儀礼は、男性だけではなく、女性も参加していたようである。これは、シヌグは男性の祭りだとする考え方を、根本的に見直さなければならないことになる。源武雄が安田型として安田と同じ分類にしている奥のシヌグは、男性だけではなく女性も村の祓いに参加していたことから、むしろ備瀬型と同じ分類という

ことになる。源とは逆の考え方をすると、女性も参加していた祓いの儀礼が古い型で、女性が参加せず、男性だけになった安田や安波の事例が新しい型だと考えることもできる。

ところで、山に登ったのは全員が女性だったのか、先頭のニートイだけが着物を着ていたことから男性たちの中に女性がひとりだけで参加していたのかは、現在では確認ができない。しかし、どちらの可能性もあることは、宮古島の儀礼から推定できる。

七　野原のサティパロウ

沖縄本島北部のシヌグは、男性たちが草の蔓を身につけて村を祓う祭りであるが、女性たちが村を祓う祭りが宮古島に残っている。宮古島は、現在全島が宮古島市となっているが、ほぼ中央部の旧上野村字野原（のばる）で、旧暦十二月の最後の丑日にサティパロウ（里祓い）が行われる。

祭りの日の夕方、十八時前から集落の北側、ニーマ井の横の道端に、小学生の子どもたちと女性たちが集まる。集まった女性たちは、当番の女性が刈ってきたマーニ（クロツグ）という植物の葉やリュウキュウボダンヅルの蔓草を頭と腰の周りに巻きつけ、両手にヤブニッケイの木の葉を持つ。このマーニの葉は先が尖っており、妖怪などをこれで追い払うという。戦前は、各家からひとりずつ女性が参加したようだが、現在は二十数名だけである。また、この祭りに、現在成人男性が一切関わることはない。

準備が終わると、集落の北東端の場所まで進み、集落の北側にある野原岳の御嶽を遙拝し、行列が出発する。

先頭は、パーントゥの面を着けた小学生で、本来は年長の男子だが、調査時は女子が交代で着けていた。子どものひとりが法螺貝を「ブーブー」と吹き、別のひとりが小太鼓をたたく。子どもたちの後に女性たちが進み、両手に持った木の葉を上下に揺らしながら「ホーイ、ホーイ」と叫ぶ。一行は、集落の北東端から集落内の辻を曲がりながら南西へ進む［写真6］。辻ごとに女性たちは大きな輪を作って左に三回廻り、その後両手の木の葉を振り上げながら「ウルルルル」と言って輪の中心に集まる。現在は、子どもたちが輪の中に入り、女性たちが祓うようになっているが、これは以前にはなかった形態の変化である。

途中、新築の家と公民館でも、左回りで建物の周りを一周して祓って行く。最後は集落南西はずれのムスルンミという場所で草枝を捨て、解散する。時間は十九時前になり、周囲はすっかり暗くなっている。

野原のサティパロウは、旧暦八月十五日に行われているマストトゥリャーの祭りの後、悪病が流行し、その原因となる妖怪を祓うためにパーントゥが始まったのだと伝えられている。[11] パーントゥの仮面が使われるようになったのは、それほど古いことではないようであり、もともと祓いの行事が古くからあったのか、どうかも今となってはよくわからない。また、女性の神役である司たちが、この儀礼にはまったく関わっていないことも他の祭りとの違いが指摘されている。

宮古島ではもう一か所、島尻の集落でもパーントゥが現れることが知られている。こちらは旧暦九月に二日間にわたって行われる。当日の午後に集落の北側、島尻漁港に近い高台にある元島（ムトゥ）で、司たちが祈願を行

う。元島は、島尻集落の発生の場所だとされ、お籠もり用の建物が残っている。そこでの祈願を終えると、集落内の上里・中里・南里にある三か所のムトゥ家と呼ぶ家を順番に廻る。ムトゥ家では、男性の古老たちが集まり、建物の外に莚を敷いて酒宴をする。一方元島から来た司たちは、住居の中で祈願を行う。三か所のムトゥ家を廻ると司たちは帰宅するが、男性たちはそのまま夕刻のパーントゥの出現を待つ。

写真６　宮古島・野原のサティパロウ

パーントゥは集落の東にある井戸のそばでキャーン（シイノキカズラ）という蔓草を身に巻き、井戸でヘドロを全身に塗り付ける。仮面を手にした三体のパーントゥが集落に現れ、道行く人や新築の家などに泥を塗って廻る。三か所のムトゥ家にいる古老たちの所にも出現し、暗闇が迫ると去って行く。翌日の儀礼も同じ内容だが、神女たちの祈願と男性の古老たちの酒宴、男性の来訪神の出現という三つの要素があることがわかる。パーントゥが男性の来訪神として知られているが、司たちの拝みの儀礼がその出現に行われていることは、伊是名島のシヌグの祭祀構造と同じである。しかし、島尻のパーントゥは野原とは時期も違い、これらの関係も不明である。おそらく野原の方が、古くからある村の祓いの行事に島尻をまねてパーントゥの仮面を取り入れたと考えるのが妥当かと思われる。

野原の方は、現在は子どもが参加する行事になっているために夕方になっているが、かつてはパーントゥの仮面は大人の男性が持っていたという。そのため、もっと夜が更けてから、男性や子どもたちが家に籠もる最中に儀礼が行われたとも考えられる。新年を迎える前の年末の大祓の要素が強い儀礼だと考えられることから、野原のサティパロウは、年末の時期に女性が草装神になって集落を祓い、一方の男性が家の中に忌籠もる儀礼と言ってもよいだろう。

このように、野原では、安田や奥と同じように草装神が現れるが、男性ではなく女性が変身している。さらに、女性の草装神の中に男性がひとりまじっていることは、国頭村の奥の場合と逆の構造である。これら

の地域が、互いに影響を及ぼしあって儀礼が伝播したとは考えにくいため、安田の型が女性が参加しないから古いとは言い切れないし、奥や備瀬のように、男性だけではなく女性が関与する方が古い型を残している可能性もある。

八　久高島のアミドゥシ

久高島は、沖縄本島南部の東海岸の沖合、約五キロメートルの所にある島で、現在は南城市（旧知念村）に属している。琉球の神話では、創世神のアマミキョが降り立った島と伝えられ、琉球王朝の聖地である斎場御嶽（せいふあーうたき）は、この島を遙拝する構造になっている。

この島には、久高ヌルと外間ヌルの二名のヌルを頂点とする神女組織が残っており、年間を通じて多くの儀礼が行われている。なかでも十二年に一度、午年の旧暦十一月十五日から四日間にわたって行われるイザイホウが有名である。これは、三十歳から四十一歳までの主婦がナンチュと呼ばれる新しい神役となる加入儀礼である。祭りの一か月前から御願立てが繰り返して行われ、十四日に御殿庭（ウドゥンミヤー）に祭場が設営される。普段は屋根と柱だけのアシャゲの建物にクバの葉で壁が造られ、背後のイザイ山と呼ばれる場所の雑木を切り開いて七つ家とよばれる二棟の建物が建てられる。ここに祭りの期間中、ヌルとナンチュが夜通し籠もる。

この祭りには、イザイホウを経験して神役となった島の女性たちも参加する。十五日夕方のオモロを唱和しながら円陣で踊る夕神遊びから始まり、十六日の髪垂れ遊び、十七日の花さし遊び、外間根人（ニーチュ）とよばれる男神がナンチュの額と両頬に朱を付け、次に外間ヌルがナンチュの兄弟の妻が作ったシトギを同じ場所に付ける朱つけ遊びが行われる。十八日は、島の全神役の女性たちと十五歳以上の男性全員が向かい合って綱を持ち、オモロとともに綱を上下するアリクヤーの綱引き、ナンチュが自分の家を廻る家廻り、神酒の入った桶の廻りを扇を持ちながら踊る神酒樽廻りが行われて神事が終わる。十九日は、祭場の片付けが行われ、二十日は島中の人びとが集まってウブクイと呼ばれる直会が行われる。

この祭りは、昭和十七年（一九四二）の鳥越憲三郎の調査[12]に始まり、特に昭和四十一年（一九六六）と五十三年（一九七八）には、多くの研究者が島を訪れ、調査報告や研究論文、写真集が発行された。[13] しかし、この神役となる条件が、久高島に生まれて久高島の男性に嫁ぎ、子どもを出産したものというものであったために、島の住民の高齢化と若年層の島外への流出によって該当者がいなくなり、平成二年（一九九〇）以降は行われなくなっている。また、この神女組織では、終身のヌルを除いて、七十歳になると神役を引退することになっていることや、久高ヌルと外間ヌルの死去によって後継がないことなどから、今後もイザイホウは行われないだろうと言われている。

もうひとつ、イザイホウとともに行われなくなったのが、午年の旧暦八月十日に行われていたナーリィキである。これは、十五歳から二十六歳までの男子に、新たな名前を命名する儀礼である。戸籍の制度が整ってからは、この時に改名することはなくなったが、それまでは童名から成人後の名前に変えたようである。後には、ヌルたちの前で名前を報告する一日だけの儀礼になったが、鳥越の調査では、元は三日間の儀礼で

あり、二日目に御嶽の神への奉告、三日目の青年たちの追い込み漁による共同漁撈が行われ、獲れた魚は浜で男性だけが分けて食べたという。この儀礼を経て、村落共同体への加入が認められたのである。[14] 島では、十五歳になると耕地が分配されることになっており、そのために一人前と見なされる儀礼である。また、イザイホウは、これと関連して、男子を産んだ主婦として社会的な認知を受ける儀礼だとの指摘もある。[15]

この共同漁撈によって浜で男性たちが会食する儀礼は、ナーリィキのような特別な祭りだけではなく、毎年旧暦十一月十三日に行われるアミドゥシでも見られる。

久高島へは、対岸の知念半島の安座間港から高速船とフェリーが徳仁港へ発着している。港と集落の間には、約九メートルの高低差があり、現在はフェリーに載せた自動車が通る新しい道が造られているが、徒歩の客は港の正面にある古くからの急な坂道を上っていく。その道が通る傾斜地に七つのヤドイと呼ばれる仮屋を建て、そこで島の男性たちが一日過ごす祭りが、アミドゥシ（網友）、もしくはアミウルシ（網降ろし）と呼ばれる。これは、久高島の島建てをしたシラタル・ファガナシーの兄妹が対岸の百名から徳仁港へ渡ってきて、七回宿をかえながら生活したとする神話を再現する儀礼だともいわれる。

ヤドイごとに組がつくられており、組の中から二年間任期で毎年一名ずつ交代するンバイアタイと呼ばれる二名の当番が選出される。

旧暦十一月十二日には、イラビとハカイメーという儀礼が行われる。午後から、ソールイガナシーの家で盃事が行われた後、島の男性たちがそれぞれ麦を持って集まって、その麦を一升枡に移し替え、そこからひとつかみずつ家族の男性の人数にひとり分多い回数だけ麦を供出するイラビと呼ばれる儀礼が行われる。麦はそれぞれの属するヤドイに分けられ、ミキアタイ（神酒当番）が持ち帰って石臼でひき、鍋に入れて煮る。それを二晩発酵させてお粥状のものを作り、これを神酒と呼んでいる。

夕方には、その年の当番の妻か母が、属する組の各家を訪ね、ひとり一合ずつで家族の男性の人数分の米を量って廻る。これをハカイメーといい、その米は翌朝に主婦が炊いて、家族の男性の人数の大きなおにぎり（ンバイ）をつくって浜へ持って行く。現在では、米の量は一合ではなく、湯のみ茶碗に七分程度に減っている。またこの祭りには、赤ん坊から七十歳までの男性が参加し、当日島に帰って来られない男性の分もおにぎりを作るが女性だけの家は、作らない。

浜では、ヤドイを建て始める。四本の柱を立ててビニールシートなどを屋根にする。なかには前側に三本の柱を立てて屋根を懸け、後側は樹木などにシートの端を括り付けたものもある。以前の屋根は舟の帆やゴザを使い、さらにもっと古い時期には茅葺きだったという。いずれも三～四坪ほどの広さで、地面には莚などを敷く。その大きさは昔とそれほど変わらないという。

ヤドイは、海側から見て坂道の右側に接して一番上の所にチバイ、中程にフカマが建てられる。坂道の左側には古い石段が一部分残っているが、その石段の左の斜面は三段に分かれて、一番上の所がナンチュ、その左下がメーマ、石段下端の左横にイギン、その左側にトゥヌチ、さらに左側へ離れて、ンギャナのヤドイがある。このうち、イギンは現在一軒だけになり、しかも女性しかいないため、元の位置には建てられず、

メーマの左隣にくっついている。

このヤドイの数は七つだが、一族単位ではなく、地区単位でもないため、その区分はよくわからない。イザイホウの際、お籠もり小屋として七つ家と呼ばれる内部が仕切られた二棟の仮屋が建てられ、ヌルとナンチェがその中に入るが、昭和四十一年（一九六六）のイザイホウに参加した八十歳の方の話では、七つ家での部屋割りとこのヤドイとは全く関係はなく、七つ家の方は、外間ヌル系と久高ヌル系の家筋の建物は違うが、部屋割りについては特に誰がどこに入るかという決まりはなく、ヌルとの親戚関係や親しい者同志が同じ部屋に入ったという。また、内部の地面はクバ葉の上に莚を敷いてあり、中に入ると、特に儀礼もなく、各自毛布を持って入り、それにくるまりながらお喋りなどをして夜を過ごしたという。

翌十一月十三日が祭りの当日である。午前八時ごろから、前日に仮屋を建てていない組では作業を始め、ンバイがそれぞれのヤドイに入る。祭りに参加する男性たちも集まり始め、主婦たちが家族の男性人数だけのおにぎりを作ってきて、傾斜地の上の所で家族の男性に渡す。ここから下へは、女性は立ち入れないことになっている。小さな子どものいる家は、たとえその子が島で暮らしていなくても、木製のサバニ（舟）の木製の模型に名前を書いたものを持ってくる。調査日は平日であったため、就学前の子どもたちと大人だけで約四十人が参加していた。

十時ごろ、この神事を司るソールイガナシーと呼ばれる漁撈の祭りを司る神役を中心に男性たちが三艘の船に乗って、島の南側の干瀬へ追い込み漁に出発する。適当な漁獲量になると帰港するのだが、いつもは十三時までには帰港するはずが、調査時は十四時すぎまでかかっていた。

捕れた魚はすぐに分けられるが、最初にソールイガナシーが久高ヌル家・外間ヌル家・外間根神を出す旧家の外間殿に分けるために数匹の魚を三つの袋に入れ、浜にある竿立岩（イシムイ・竿を挿す穴が横に空いているが、現在は竿を挿さない）の前の神様の俎（まないた）とよばれるコンクリートの四角い台に大きな魚を七匹、間隔を空けて並べて供える。一番左の二匹はくっつけて並べるが、これはヤドイがひとつくっついていることによるらしい。残りの魚はヤドイの数に分配し、小魚は火を燃やして焼き魚に、大きな魚はその場で刺身にする。

浜には、各ヤドイで準備した神酒を入れた器と茶碗をふたつ、箸と匙を高膳の上に載せて並べる。十四時五十分ごろから、待ち受けていた着物姿の男性の神役と四人の女性の神役が浜へ下りてきて海岸線に横一列に並び、まず南の海（龍宮）を拝んでから［写真7］、東の方角（ニライカナイ）を拝む。豊漁を祈願するという。続いて順番に各ヤドイの神酒を少し匙ですくって口にする。その儀礼が終わるとすぐに一行は坂道を上がる。女性の神役たちはそのまま帰宅し、男性の神役は自分のヤドイに入る。各ヤドイでは供えてあった神酒を下げて飲み、おにぎりと焼き魚、刺身を味噌などで味付けをして会食する［写真8］。十五時三十分ごろには、食事を終わって片付けをし、仮屋も撤去する。

三歳以下の幼児の分は、サバニの模型の中におにぎりを入れて持ち帰る。また、ヤドイで作られた桑の葉に魚の切り身三切れほどを包んだフカラクと呼ばれるものが家族の数だけ各家に配られ、それを受け取った主婦は、家の中の火の神に供える。比嘉康雄によると、浜での祈願のあ

写真７　久高島のアミドゥシ（海の彼方を祈る神役）

写真８　久高島のアミドゥシ（ヤドイで食事をする男性たち）

と、外間殿と久高ヌル家でのイラブーを中心とするごちそうが出る慰労の食事の儀礼も、フカラクと呼ぶようである。[16]

現在は一日だけで、十六時過ぎには仮屋の撤去も終わるが、戦前までは、そのまま各ヤドイで二晩泊まったという。報告書などでは男性が全員泊まったとのことだが、今回確認すると、二人の当番だけが泊まったという。この祭りは新暦だと十二月中旬にあたり、調査時も低気圧の影響で強風が吹いていたように、沖縄といえども肌寒い時期である。吹きさらしの中で過ごすため、当番は交代で火を焚きながら夜通し過ごし、初日のおにぎりと焼き魚、味噌などを食事にしたという。

さらに、これまでの報告書ではあまり触れられていないが、島の年配の方の話によると、この日、集落内では未婚の娘たちが集まって遊んでいたという。

集落の中心部、現在の郵便局（もとは公民館）の前の道を二筋南側へ行った所に三角形の広場（三角野（モー））がある。昔はここで部落の常会が行われて島の決め事の話し合い、現在も三月と七月にここで集会がある。

アミドゥシの日には、若い未婚の女性たちが白い衣裳を着て集まり、順番に前の人の肩に両手をかけて輪になり、歌を唄いながら左右に身体を揺らして前に進む踊りをした。また、芋の葉の蔓で草の輪（ガンシナー）を編み、丸い大きな敷物を作った。これはティビケーと呼ばれ、その上に女児を乗せ、交代で歌を唄いながらくくりつけた縄を引っ張った。時には久高ヌル殿内から徳仁港の付近まで引っ張りながら走って遊んだという。何人かの七十歳以上の女性に尋ねたが、どの方も小学生のころにそれに乗って引っ張られた思い出があるという。

この日は祭りの日であり、浜で男性の儀礼が行われている間のため、単なる遊びではなく、一般に神遊（かみあし）びと呼ばれる祭りの行事であったのだろう。つまりこの日は、男性と未婚の女性が祭祀に関わっていたことになる。それでは、残りの主婦はどうしていたのだろうか。

この祭りでは、主婦たちは大きなおにぎりを作るだけで、他に何もしていない。現在は、食べきれないため、量を少なくして、それでも余ったおにぎりは各自が家に持ち帰っている。このおにぎりが大きいのは、一日だけの儀礼食ではなく、二泊三日分の食料だったのである。現在のアミドゥシは一日だけだが、かつては二晩ヤドイに泊まったという。つまり、これは忌籠りの儀礼であり、その食料のために大きなおにぎりや魚が必要だったのである。祭りはまだ続いていた。そして、この物忌みが明ける日は、旧暦十一月十五日であり、午年にはイザイホウが始まる日である。

九　神女の成巫式

イザイホウは、神女の成巫式の儀礼であるが、なぜ十二年に一度なのかははっきりとしていない。他の地域では、該当者があれば毎年でも行われている。

沖縄本島北部の古宇利島では、旧暦六月二十五・二十六日のサージャーウェーと呼ばれる特定の家を男女の神人が訪問してウムイを歌う儀礼がある。この時新しく神女となる該当者がいれば、それに先だって二十三日の午後にヌル殿内でカミサガイという儀礼が行われ、夜のアサギでの祈願から祭りが始まる。また、ウンジャミの際に行われる所も多く、国頭村の奥間と比地では、旧七月中亥日のウンジャミの前、中酉日に奥間で、中戌日に比地でアラハンハミサカの儀礼が行われる。[17] 大宜味村謝名城でも、旧七月二十日前後の亥の日のウンガミの前夜、ウカタビという祈願の後にアラハンサガという儀礼が行われ、新しい神女が誕生する。[18]

普通は、該当者がいる場合は毎年であってもこの儀礼を行うはずなのに、久高島ではその間隔が長くなっている。それについて鳥越憲三郎は、ナーリィキが十二年に一度になっている理由として、「部落の戸数が少ないため、十二支の一廻りに一回これを纏めて行っている」からだとする。[19] ナーリィキとイザイホウが対応しているとすると、イザイホウも同じ理由で十二年に一度になっているはずである。しかし、ナーリィキの方は、儀式が行われなくとも、十五歳に達した青年に島の耕地が割り当てられていることから実質的には問題はないのであるが、イザイホウの

場合は神役の数が増えないという事態になる。これは単に島内の人数が少ないだけではなく、経済的な理由があるのではないだろうか。

久高島では基本的に、自給自足の生活が送られていたため、アミドゥシの中でイラビやハカイメーなど、各家で麦や米の供出量を量るのは、明らかに負担をそれぞれ均等にすることが儀礼になったのである。イザイホウが十二年に一度になったのは、祭りが大規模であったために負担が大きく、次第に間隔が空いていき、最終的に十二年に一度になったのではないだろうか。

アミドゥシでは、男性たちの祭りと忌籠りの儀礼が行われ、集落の中心では、未婚の女性たちの神遊びの儀礼が行われていた。また、女性は立ち入り禁止だとしながら、港に神役の女性たちが下りて来て拝みの儀礼が行われるのは、この祭りが完全に男性だけの祭りではないことを意味している。

これまでのイザイホウの報告書では、アミドゥシとイザイホウは別の儀礼と考えられていた。それは、イザイホウの報告が、鳥越憲三郎の昭和十七年の調査が最初であり、その際には島の人たちから祭りが行われることすら秘密にされていたという。戦後はアミドゥシが一日だけの行事になっており、娘たちの神遊びもなくなっていることからも、無理のないことである。

しかし、アミドゥシが男性たちと未婚の女性たちの儀礼になっていたのは、引き続いて主婦たちの儀礼、イザイホウが行われるからではないだろうか。イザイホウでは、男性たちに替わって、新しく神役になるナンチュたちが忌籠もっていた。

現在では、アミドゥシが終わると、次の久高島の年中行事は旧暦十一月中旬の壬日（ミンニー）にフバワクが行われる。これは、一年の最後の儀礼であり、イザイホウで神役となった女性が七十歳に達すると、この祭りを最後に神役を引退するという。イザイホウで新しい神役が誕生した後、年齢に達した女性が神役を退いたのである。

各地の祭りで、宮座の長老や頭屋などの神役が交代するのは、その集落でもっとも大きな祭りの際か、祭りの直後に行われることが多い。久高島では、アミドゥシの男性と未婚の女性たちの儀礼からイザイホウの主婦たちの儀礼まで、七日間の忌籠りと直会までをひとつの祭りと見るべきではないだろうか。

十　男女の共同祭祀

祭祀を研究する場合、現在残っている儀礼だけを検討しても全体の姿を解明することはできない。安田のシヌグの場合も、山から草装神が降りてくる儀礼は一日目で、そこから三日間にわたって仮屋に男性が籠もって祭りが行われていた。奥でも籠もりはなくなっているが、三日間という祭りの期間は残っている。

備瀬の場合は六日間の祭りであり、シヌグという儀礼は特にその中の一日だけを指す。本部町のシヌグは、集落によって違いがあるが、三日間から八日間にわたって祭りが行われる。伊平屋島や伊是名島の場合も、ウンジャミとシヌグの両方が一連の祭りとなっていると考えると、祭りの全体像の見方が変わってくる。伊平屋島の田名でウンジャミの祭りの

前夜に海神の女性神役が各家を一軒ずつ廻る儀礼と、安田や奥で男性が草装神となって山から降りてきて集落を祓う儀礼とが対応する。その集落を祓う儀礼には女性も関与していていたが、集落によっては山に登ることなどから男性だけに限られるようになって儀礼が変化したのである。

確かにシヌグは男性が中心となり、ウンジャミは女性を中心として祭祀を行っているが、シヌグで女性が、ウンジャミで男性が祭りに全く関与していないわけではない。野原で女性が集落を祓っているときに、男性は祭りに参加せず、何もしていないのではなく、家の中で神霊を迎えるための忌籠りをしていたのである。安田や伊是名島の祭りでは、男性の祓いの儀礼とは別に、神女などがアシャゲを廻って拝(ウガン)みの儀礼を行っているのに注目することも、祭りの全体像を考察するのに不可欠である。

男性の祭りと女性の祭りという分類は、各地の祭祀研究でよく使われている。しかし、女人禁制だといっても、表の儀礼の場所に男性だけしか入ることを許されないだけで、直会の食事の準備など裏方の仕事は女性たちが取り仕切っていることはよく見られる。シヌグの祭りでも、男性たちの忌籠りの儀礼中は、女性はアシャゲに集まったり、家にいたりすることが多いが、これは祭りに不参加なのではなく、参加しているのである。

ウンジャミでも、神女たちが深夜に各家をまわって、祓いを行っている際には、男性たちは家を出ることになっていたという。その男性たちは、他の集落にいる親戚の家に行くこともあっただろうが、神女たちに出会ってはならないとすると、ほとんどはどこか決まった場所に集まっていた可能性がある。その男性たちも、祭りに参加していなかったというわけではない。

シヌグやパーントゥは男性の来訪神が現れる祭りだが、来訪神が現れる前や儀礼の最中に、神女たちがアシャゲなどで拝みの儀礼を行っていた。これらは、男性と女性がそれぞれ儀礼の表面に出ているだけで、男性だけ、女性だけの祭りではない。久高島の場合も、イザイホウが十二年に一度大規模に行われる儀礼であることから注目され、アミドゥシが男性の祭りとして別の儀礼と考えられていたが、一続きの祭りと考えることで、シヌグやウンジャミと同じ祭祀構成を持っていたことが明らかになってくる。

けっして、久高島のアミドゥシだけを見て男性の祭り、イザイホウを女性の祭りと見るのではなく、今はなくなっている未婚の女性たちの神遊びを加えて、島民すべてが神を祀る一連の祭りであったという考え方をしなければならない。

註

① 上江洲均著『伊平屋島民俗散歩』（一九八六年、ひるぎ社）。

② 拙稿「沖縄のまつり ―シヌグとウンジャミ―」（一九九八年初出、『祭祀空間の伝統と機能』二〇〇四年、清文堂出版）。なお、一九九一年調査時の田名の海神祭の写真は、同稿と拙編著『聖域の伝統文化』（関西大学出版部、一九九五年）の表紙カバーに載せている。

③⑦ 小野重朗「シヌグ・ウンジャミ小論」一九七八年（『奄美民俗文化の研究』法政大学出版会、一九八二年）。

④ 源武雄「シヌグに就いての覚え書」一九七〇年（『日本祭祀研究集成』

第五巻、名著出版、一九七七年）。

⑤⑥⑨　宮本演彦「沖縄国頭のシヌグ祭」一九五二年（馬渕東一・小川徹編『沖縄文化論叢』第三巻、平凡社、一九七一年）。

⑧　本部町のシヌグについては、本部町文化財保存調査委員会編『本部町の文化財　第十集　本部のシヌグ』（本部町教育委員会、二〇〇一年）、仲田喜明著『本部のシヌグ』（沖縄学研究所、二〇〇三年）がある。

⑩　国頭村教育委員会『国頭村史・別冊』「国頭村の年中行事」（国頭村、一九六七年）。

⑪　平良新亮「野原のパーントゥ」（『上野村誌』（村制四〇周年版）四四二頁、上野村役場、一九八八年）。

⑫　鳥越憲三郎著『琉球宗教史の研究』第三編・第一章・第三節「イザイホウの神事」二四三～二七六頁、角川書店、一九六五年。

⑬　主要なイザイホウの調査報告としては、沖縄県教育委員会『イザイホー調査報告　―久高島イザイホー民俗文化財特定調査―』（沖縄県教育委員会、一九七九年）。

⑭　鳥越前掲書、註⑫参照、第四編・第一章・第三節「成年式と改名」四〇二～四一三頁。

⑮　上井久義「御嶽の神役」一九九五年（『上井久義著作集第六巻　琉球の宗教と古代の親族』清文堂出版、二〇〇五年）。

⑯　比嘉康雄著『神々の古層②　女が男を守るクニ　―久高島の年中行事〔Ⅱ〕』ニライ社、一九九〇年、『神々の原郷　久高島』下巻　第四部・第二章・七「アミドゥシ　―漁撈のまつり―」（第一書房、一九九三年）。

⑰　『国頭村史』別冊、四六ページ（国頭村役場、一九六七年）。

⑱　島袋源七著『山原の土俗』一九二九年（『日本民俗誌大系』第一巻、角川書店、一九七四年）。

⑲　鳥越前掲書、註⑫参照、四〇二頁。

（参考文献）

当間一郎「久高島のアミドシ祭り」、田中義広「久高島のイザイホー」（『まつり』一六号、一九七〇年、まつり同好会）。

古典と民俗学の会編『沖縄県久高島の祭り』古典と民俗学の会、一九八一年。

当間一郎（文）・友利安徳（写真）『神々のふるさと久高嶋』一九八二年、沖縄公論社。

古典と民俗学の会編『沖縄県久高島の祭り』古典と民俗学の会、一九八一年。

平良市教育委員会編『国選択無形民俗文化財記録作成　島尻のパーントゥ調査報告書』一九八五年。

伊是名村史編集委員会『伊是名村史』下巻（島の民俗と生活）、伊是名村、一九八九年。

桜井満編『久高島の祭りと伝承』桜楓社、一九九一年。

名護市史編さん室『やんばるの祭りと神歌』名護市教育委員会、一九九七年。

赤嶺政信「アミドゥシ　久高島」（『沖縄県文化財調査報告書第一二七号　沖縄県の祭り・行事　―沖縄県祭り・行事調査報告―』沖縄県教育委員会、一九九七年）。

（追記）

本稿の祭りの現地調査は、備瀬のサグンジャミと奥のシヌグが二〇〇三年八月、野原のサティパロウは二〇〇五年一月、安田のシヌグと伊平屋島田名のウンジャミ、伊是名島のシヌグは二〇〇五年八月、久高島のアミドゥシは二〇〇五年十二月に行った。